

## I. 祈りがいつも即座にかなえられるというわけではない

祈りがいつも即座にかなえられるというわけではないことは、経験的に私たちは知っています。私たちの願う願望や欲望が、熱心な祈りさえあれば必ずかなうと豪語する宗教があります。

「南無〇〇〇〇経！、南無〇〇〇〇経！」と宗教の教典名を繰り返し繰り返し、何万回も唱えることで、自分の利益が保証され、願い事はすべて叶うと教える宗教です。

この宗教の場合、おまじないのような文言を必死の形相で唱える人間の熱心さ、真剣さが願い事を叶える最大の要因となるようです。

聖書にも似たようなところがあると勘違いする人がたまにおられます。

「クリスチャンも祈るときは、熱烈に、必死の形相で、繰り返し繰り返し同じお祈りの課題、あるいは祈祷文を唱えなければならない。苦痛をとまなうような不自然な姿勢で祈ればなお良い。」ということを祈りが叶えられる条件であるかのように考える人もいます。そのような人が、自分の熱心さが祈りの答えられる確率と比例するという主張の根拠としたがるのが以下の聖句です。

いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話されました。

「ある町に、神を恐れず、人を人とも思わない裁判官がいた。その町に、ひとりのやもめがいたが、彼のところにやって来ては、『私の相手をさばいて、私を守ってください。』と言っていた。彼は、しばらくは取り合わないでいたが、後には心ひそかに『私は神を恐れず人を人とも思わないが、どうも、このやもめは、うるさくてしかたがないから、この女のために裁判をしてやることにしよう。でないと、ひっきりなしにやって来てうるさくてしかたがない。』と言った。」主は言われた。「不正な裁判官の言っていることを聞きなさい。まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。あなたがたに言いますが、神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいます。しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」 ルカ18:1-8

A. このたとえ話は、似たものを例証する時に用いる「類比」の形を用いたたとえ話ではない

このたとえ話は、似たものを例証する時に用いる「類比」の形を用いたたとえ話ではありません。そうではなくて、正反対のものをあえて用い、コントラストで語ることにより、要点をより鮮明に浮き上がらせようとする手法、つまり対立、対比の原理を用いたたとえ話なのです。

創造主を信じる人々であるのに、祈らずにはおれないような、苦しい状況におかれた人たちがいたということです。そのような人々が、「夫に先立たれた未亡人の女性」にたとえられています。そして、不当、不正な扱いを受け苦しめられているこの状況を正しく、公正に裁いて欲しいと彼女は訴えています。

公正な裁判をしてくれるはずの裁判官が、このたとえ話では、「神を畏れない、不遜な悪徳裁判官」だということです。これは、創造主が、不遜な悪い裁判官だと例証するためにイエスさまが語っておられるではありません。極端に正反対のものを引き合いに出して、「こんな悪い裁判官でもこうなのだ」とおっしゃりたいのです。

イエスさまのお心の内には、「だから、ましてや、憐れみと恵みに満ちたあなたがたの天の父は・・・」という思いがおりなのです。

#### **B. 旧約聖書には正しい裁判官の姿が求められている記述がある**

旧約聖書では、正しい裁判官の姿が求められている記述が書き記されています。

またそのとき、私はあなたがたのさばきつかさたちに命じて言った。「あなたがたの身内の者たちの間の事をよく聞きなさい。ある人と身内の者たちとの間、また在留異国人との間を正しくさばきなさい。さばきをするとき、人をかたよって見てはならない。身分の低い人にも高い人にもみな、同じように聞かなければならない。人を恐れてはならない。さばきは神のものである。あなたがたにとってむずかしすぎる事は、私のところに持って来なさい。私がそれを聞こう。」 申命記1:16-17

#### **c. 創造主が命じている社会的弱者に対する配慮もあたりまえのこととして述べられている**

また、創造主が命じている社会的弱者に対する配慮もあたりまえのこととして述べられています。

善をなすことを習い、公正を求め、しいたげる者を正し、みなしごのために正しいさばきをなし、やもめのために弁護せよ。」 イザヤ1:17

主はこう仰せられる。公義と正義を行ない、かすめられている者を、しいたげる者の手から救い出せ。在留異国人、みなしご、やもめを苦しめたり、いじめたりしてはならない。また罪のない者の血をこの所に流してはならない。 エレミヤ

22:3

ですから、不正な悪徳裁判官でさえ、公正な裁きを求め、夜昼叫ぶ苦渋の訴えを「うるさいから」という理由だけでも聞いて裁判をしてくれるのだから、ましてや、愛に満ちた恵み深い創造主が、正しい裁きをつけずに放っておくはずがないではないかというのがイエスさまのおっしゃりたいことだったのです。

**D. ルカ18章の箇所では取り上げられている祈りの内容は、人々の何かをほしが  
る願望、欲望などがテーマではない**

このルカ18章の箇所では取り上げられている祈りの内容は、人々の何かをほしが  
る願望、欲望などがテーマではありません。そうではなくて、不当な苦しみ、理  
不尽な扱いや中傷を受けている創造主を信じる人々への弁護と名誉回復のための  
正しい裁きを求める祈りです。

3節に『私の相手をさばいて、私を守ってください。』という表現が用いられて  
います。

7節には、『選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放って  
おかれることがあるでしょうか。』

8節には、『神は、すみやかに彼らのために正しいさばきをしてくださいま  
す。』という表現が用いられています。

**E. このたとえ話の目的は、「創造主は人間の祈りの真剣さ、執念深さに応答す  
るようせきたてられたら、渋々その祈りに答えてくださるようなお方だ」と  
いうことを教えることにはない**

イエスさまがこのたとえ話をされた目的は、なにも、「創造主は人間の祈りの  
真剣さ、執念深さに応答するようせきたてられたら、渋々その祈りに答えてくだ  
さるようなお方だ」ということを教えることにあったわけでは決してありませ  
ん。

創造主を信じ、正しく生活をしている人々が迫害を受け、困難な状況に陥れさ  
せられるということが、現実には起こりうるのです。

確かに、キリスト・イエスにあつて敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受け  
ます。 2テモテ3:12

初代教会の頃から、そのような残酷かつ悲惨なキリスト教徒への迫害があつた  
ことを歴史は記録しています。イスラム教の布教拡大は、「コーランか剣か」と  
いう言葉で表されているように、布教していった地域の人々の血を流し、教勢を  
拡大していきました。仏教は、布教先の地域の人々の風習と妥協し、埋没、変形  
するかたちで広がっていきました。ところがキリスト教の場合は、クリスチャン  
たちが迫害され、殺されていく状況の中で世界に広まっていきました。キリスト  
教の世界宣教は、殉教の歴史であり、自らの血を流されつつも、彼らは主イエス  
キリストの御名を語り伝え、広めていったのでした。

ですから、主の選民である人々は、「夜、昼、神を呼び求めよ」と命令される必要などなかったというのが、本来の状況です。理不尽な扱いや迫害、ありもしない悪口、雑言をなげつけられ、否応なく「夜、昼、神を呼び求め」ざるを得ないような命の危険に、彼らはさらされていたのでした。

**F. このたとえ話で重要なのは、祈りの真剣さや、熱烈さに強調点がおかれていたのではなくて、イエスさまが心配しておられたのは、創造主を信じる人々の「信仰」だった**

このたとえ話で重要なのは、祈りの真剣さや、熱烈さに強調点がおかれていたのではなくて、イエスさまが心配しておられたのは、創造主を信じる人々の「信仰」だったのです。

「しかし、人の子が来たとき、はたして地上に信仰が見られるでしょうか。」  
ルカ18:8

失望しないで祈り続けるべきだというのは、創造主の報復と正しい公正な裁きは、必ずなされる時が来るのだから、そのことを信じて、祈り続けなさいということを経験に語られています。少々逆説的なことのように聞こえるかもしれませんが、「信じるから祈り続けられる」というものではなくて、実は、「祈り続けることによって、私たちは自分が創造主のお約束を信じているんだということを実感し続けることができる」のではないのでしょうか。

からし種一粒ほどであっても、もし私たちに正しい信仰があれば、本来一度祈るだけで、主はお応え下さるのですから、祈り続ける必要などないと、いえるかもしれませんが。ところが現実には、主の公正な裁きは、3分間待っただけで行われるという即席麺、カップラーメンのようなものではありません。創造主の御前で信仰を失い、失望する可能性は、厳しい迫害がなされればなされるほど高いと言って良いでしょう。そのような中、純粋な信仰を保ち、確認し続けるためには、祈り続けることが、私たちにとって役に立つのです。

**G. 創造主の正しい裁きと悪しき者たちへの報復は、実はクリスチャンたちが、熱心に祈ろうと祈るまいと、主の時が来れば必ずなされる**

創造主の正しい裁きと悪しき者たちへの報復は、実はクリスチャンたちが、熱心に祈ろうと祈るまいと、主の時が来れば、必ずなされることなのだと聖書は教えています。創造主の報復と審判は、主が人間の熱心さや祈り深さにほだされてなされるというようなものでは、決してありません。ご自身の主権のもと、定められることだからです。

につくき悪者どもへの報復を一生の恨みとして持ち続け、ワラ人形に釘を打ち込むような、呪いの祈りをクリスチャンたちに祈るよう勧める文章は、聖書には書かれておりません。そうではなく、むしろローマ人への手紙には、逆にこのよ

うに記されているのです。

あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってははいけません。喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣きなさい。互いに一つ心になり、高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思っでははいけません。だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、すべての人が良いと思うことを図りなさい。あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。」 ローマ 12:14-19

#### H. 創造主の裁きが、信徒の祈りに答えて即座になされないのには、理由がある ようだ

ですから、創造主の裁きが、信徒の祈りに答えて即座になされないのには、理由があるようです。迫害する人々への私的な恨みや呪いが、キリストの愛によって変えられ、クリスチャンたちが、自分にいじわるをしてくる人々に対しても、愛と恵みをもって対応することを通して、創造主の愛が表される機会となることを、主は望んでおられるのではないかと考えられるのです。

このイエスさまの御心が実現するために必要なのは、実は、クリスチャンたちの「信仰」です。そしてその信仰を行動に移すためにも、日々、創造主の主権とご愛を確認する必要がある、私たちにはあるのです。そのために、失望しないで祈り続けることの勧めが、必要不可欠なのだと思えるのです。

主の絶対的な主権に信頼し、信仰を持ちつつ、祈り続ける。その時、私たちは、私たちのための報復や、正しい裁きとは別の主の御心と私たちに対する主のご期待を示されるのではないのでしょうか。その主からの語りかけに日々、私たちが耳を傾けながら、失望しないで、主に頼りつつ歩む信仰生活こそが、主のお喜び下さるクリスチャン生活だと思えるのですが、いかがでしょうか。

勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。望みを抱いて喜び、患難に耐え、絶えず祈りに励みなさい。 ローマ12:11-12

あなたがたのあった試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に合わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。 1コリ10:13

II. 不平不満を言う代わりに、あきらめず挑戦し続けた男がいる  
不平不満を言う代わりに、あきらめず挑戦し続けた男がいます。

この人の人生をご紹介します。皆さんがこの人だったらどうでしょうか。一般的に見て、この人の人生が幸せだったかどうかを、マルペケで評価してみてください。

1809年2月12日日曜日 誕生

1816年 家族もろとも住んでいた家を追い出され、彼は、家計を支えるため7歳で働き始める

1818年10月5日 毒草を食べた牛から搾乳された牛乳をそうとは知らず飲んでしまった母ナンシーが34歳で死んでしまう (アブラハム9歳)

1831年 事業に失敗する (22歳)

1832年 州議員に立候補 落選 (23歳)

仕事を失う。法律を学ぶ学校に行きたかったが行けなかった。

1833年 友人から融資して貰い、事業を始める。しかしこの年の終わりに破産。この時の借金のため、彼は、この後、17年間もかけて返済しなければならなくなった。

1834年 州議員に再立候補する。 当選 (25歳)

1835年 婚約をしたが、婚約者の女性アン・ラトレッジがその六ヶ月後に死亡 (26歳) おそらく腸チフス

1836年 重い神経衰弱になり、六ヶ月入院 (27歳)

1838年 州立法府議員に立候補 落選 (29歳)

1840年 選挙人に立候補 落選 (31歳)

1843年 国会議員に立候補 落選 (34歳)

1846年 国会議員に再立候補 当選 (37歳)ワシントンで良い成果をあげる

1848年 もう一度国会議員に再選の出馬 落選 (39歳)

1849年 自分の居住する州の領地管理公務員の職を希望したが拒否される

1854年 米国合衆国上院議員に立候補 落選 (46歳)

1856年 党からの副大統領候補選にでも、100票にも満たない惨敗をきつす

1858年 もう一度米国合衆国上院議員に立候補 またもや落選 (49歳)

1860年11月6日 米国第十六代大統領として当選 (51歳9ヶ月)

1865年4月14日金曜日フォード劇場にて射殺される (56歳)

彼の人生、○はたったの三個です。×は、十七個もあるのです。御利益中心宗教の基準からしたら、九割近い敗北の人生です。政治家として、当選は三回、ですが、なんと落選は、八回です。七割以上が敗北というこの彼が落選した時に語っ

た言葉をお聞き下さい。

### A. 彼の残した言葉

道はガタボコで、ぬかるみ、滑りやすかった

僕の足は滑って、道から転げ落ちそうになった

でも、なんとか体勢を立て直し、自分に向かって独り言をつぶやいた・・・

「なあに、ちょっと滑っただけさ、転んだわけじゃない！」

上院議員選に出馬し、落選した時の言葉です。そして彼は、こうも言っています。

私たちはすべて、あきらめないでやり続けなくちゃいけないと言う義務感を持っているものだ。苦しくてもやらなくちゃならないという責任が。私は、その義務感を成し遂げる使命を与えられたと思っている。 アブラハム・リンカーン  
この苦しくてもやり遂げなければならない、使命感を彼は、誰から与えられたと  
考えていたのでしょうか。

クリスチャンであった、リンカーンは当然のこと、聖書の創造主からその使命感  
を与えられていたのです。九割方失敗だらけのように見えるリンカーンですが、  
アメリカ歴代の大統領の中でも、世界中で、最も尊敬されている大統領なのでは  
ないでしょうか。

「自分のいのちを得ようとする者はそれを失い、かえって失おうとする者は、必ず得る」「死んだ者は生きる」です。

「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。」と今朝の聖句は言っています。失望しないで、信じ、祈り続けましょう。

自分の子供にさえ譲ることができずに、相続財産のことで争っている人がいます。

私たちは、何でも他人に譲り、もっともっと祝福されたいものです。あの創世記に出てくるヨセフのように・・・。

「受けるより、与えるほうが幸いだ」と教えられたのは、イエスさまです。(使徒20:35)

### B. 私たちの心の中は汚れに満ち、何一つ良いものがない

皆さん、人生には勝利の秘訣があるのです。

人間は、自分が赦されなければ、他人を赦すことはできません。自分が愛されなければ、他人(ひと)を愛することはできないのです。人は、愛された分量し

か、他人を愛することができないのです。

どんなにギュウギュウ搾っても、私の内から良い搾り汁はでてきません。マヨネーズの入ったプラスチック容器を絞れば、マヨネーズが出てきます。トマトケチャップだったら、トマトケチャップ、ワサビだったらワサビが出てきます。池田豊に圧力をかけて、絞ったら、何が出てくるとおもいますか？不平と、不満、醜いものばかりがでてきます。ちょうど旧約聖書の中に記録してある、荒野を旅していたイスラエルの民と同じです。つまようじの先で、重箱の隅をほじくるように、自分の心の中をつついてみても、私は残念ながら、自分の中に善と名のつくようなものが一つもないということがわかりました。あのパウロも、自分のありのままの心をじっと見つめて、こう告白しています。

「私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。・・・私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」（ローマ7:18-19,24)

このパウロが叫んだように、私は、自分の本性を知れば知るほど、聖書がわかればわかるほど、自分の情けなさ、無力さ、みじめさに直面させられます。自分が心底、偽善者であることがあばかれるのです。圧力を加えられ、苦しいところを通らされることによって、メッキが剥がされてみると、なんと私は、自分が、嘘とごまかしで固められているような人間だということが明らかになりました。

### c. 星野富弘の詩

星野富弘さんが、野の花を見てよんだ詩に、次のようなものがあります。

黒い土に根を張り  
どぶ水を吸って  
なぜ、きれいに咲けるのだろう  
私は大勢の人の愛の中にいて  
なぜみにくいことばかり  
考えるのだろう

私の本質は、一皮むけば本当は醜いものです。しかし、その私を、神はキリストと共に十字架にくぎづけにしてくださったと聖書は言います。そして、「私はキリストと共に死んだ」という体験を私はさせていただきました。それ以来、私は負けて勝つという道があることを学んだのです。

イエス様は、私の罪を赦すために、病人のために医者が必要なように、その罪をいやすために来てくださいました。赦されるべきではない者の罪を赦してくださいました。そのためにイエスさまは、私の身代わりになって、十字架にかかれたのです。

私たちは、人から棄てられたり、落伍者の烙印を押されたりすることがあった



としても、主イエスキリストの十字架の恵みを体験しているならば、必ず、主の御心の時に、主が引き上げてくださるのです。「より高くジャンプするためには、より低くしゃがむ必要がある」という言葉を聞いたことがあります。

第二次世界大戦中に、イギリスの町、ロンドンがドイツ軍の空軍による空襲で破壊され、大打撃を受けたことがありました。ロンドンを代表するデパートの入り口も木っ端みじんに破壊されてしまいました。空襲の翌日、そのデパートが張り紙を出しました。そこには、こう書いてあったそうです。

「当デパートは、本日も開店いたします。門を大きく広げて、お待ちいたしております」

焼け跡でただぼんやり涙ぐむのではなく、それを笑いに変えて、「こんなことではへたばらないぞ！」という心意気を示した、イギリス人らしいユーモアが、ここには表現されています。

私たちも、今置かれている状況が、なんとも惨めで、情けなくなるような、辛いことばかりでも、目を天に向け、空を仰いで、創造主のご介入を期待し、信じ、明るく前進していこうではありませんか。

「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。」と今朝の聖句は言っています。失望しないで、信じ、祈り続けましょう。星野富弘さんは、辛い経験、苦難を通して、創造主のすばらしい祝福を得ることができたと語っておられます。そしてそのことを簡潔に次のような詩に表現しておられます。

幸せという  
花があるとすれば  
その花の  
蕾（つぼみ）のようなものだろうか  
辛いという字がある  
もう少しで  
幸せに  
なれそうな気がする

辛いという字の上の点を少し上に伸ばし、小さな横棒を入れて見て下さい。十字架になりませんか。辛い辛い体験が、十字架を見上げることで、何という字になりますか？そうです。幸せという字になるんです。

### III. ひび割れたリュートの魅力

聖文舎発行 L・コールストーン著 戸川隆訳 「障害者と共に歩む牧会カウンセ

リング」という本の16-17頁に“ひび割れたリュートの魅力”という文章があります。

「リュート」という、ギターに似た楽器のことを最近聞いた。十四～十七世紀に発達した楽器であるが、その魅力ある音色が、どうしてできたかということである。ずっと昔、風化作用というか、古びたリュートの胴部には、ひび割れができた。

すると、その音色が新鮮で、もっと美しい質のものに変わったのである。そのうわさはすぐに広まった。それ以後、リュート作りの職人たちは、楽器にひびを入れる工夫をし、場合によっては、石でたたいたりもしたという。

私は、この賢い職人の話を聞いたとき、すぐに家に帰って、家宝として母が残してくれたヴァイオリンを調べてみた。それはもともと祖父のもので、祖父はすぐれたヴァイオリニストであった。彼は、その生涯に、いくつかのヴァイオリンを集めて演奏していたので、私が調べてみると、はたせるかな、その胴部にはひび割れがあった。

もっとも、その数年前に、そのヴァイオリンをみたとき、胴部にひびみいたいのがあるのをみて、それがこわれてしまったのだと信じ、嘆いたものだった。そして、元のように、綺麗に修復してくれる職人を見つけることができないものかと考えたのであった。

さて、何かの障碍を抱えている人は、すべて"胴部"にひびのある楽器のようなものである。大きなひびがたくさんある人もいるし、小さなひびの人もいる。実は、そうしたひび割れが、ヴァイオリンの場合と同じで、人の場合も、その生涯を奏でる"音色"の質を高めているのである。

ある人は、私のこの仮説に反対するかもしれない。彼らは、ひびがあまり多いと、実際には不協和音や、相さからう反響になり、澄んだ音より、歪んだ音を出すことになるかと主張するかもしれない。しかし、私は、障碍を持った友人から得た知識だけでそう思っているのではない。人工透析をする身となり、機械につながれ、生かされている運命を担うことになった、私自身の体験から、自分なりに、そういう結論を得ているのだ・・・。私が関心を抱いているのは、人々が、自分のもつ可能性を、進んで現実化しようとしているかどうかということである。ハンディを持つ人は、障碍によって、どれ程制限を受けていようと、実はまだ現実には、生かされたことのない、新しい力を発揮することができるはずなのである。どんな人でも、その成長の可能性を割り引きされてはならない・・・。しかし、このような成熟は、自動的に起こるものではない。苦痛と戦う努力が成熟の力を強めるのだ。私は、災難と苦痛が、人間の精神を精錬し、それ以前に

は、なかったような深みと率直さと思いやりを与えてくれると信じている。私たちが、苦難や災難を好きこのんで求めなければならないと言っているのではない。しかし、苦難に見舞われた時、そしてそれは、たいいていの人に訪れるものではあるが、その苦難と取り組む時の姿勢のことを言いたいのである。

「いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを教えるために、イエスは彼らにたとえを話された。」と今朝の聖句は言っています。失望しないで、信じ、祈り続けましょう。

### アクション・ポイント（生活への適用）

1. いつでも祈るべきであり、失望してはならないことを主は弟子たちに教えようとされました。あなたは創造主に向かって祈っておられますか。
2. 私たちは結果がすぐに見えないと失望しがちです。また、自分の思い通りになることが、祈りの目的だと思いがちです。日本の新興宗教で教えられている御利益中心の祈りと、聖書が教える祈りには違いがあると思いますか。
3. 不平不満を言う代わりに、失望せず挑戦し続けた人のことについてあなたはどう思いますか。また星野富弘さんの詩や、ひび割れたリュートの魅力についてどう思いますか。他の人と語り合ってみましょう。